

「学習者コーパスを活用したモダリティ研究の可能性」

迫田久美子（広島大学／国立国語研究所）

佐々木藍子、須賀和香子、細井陽子（国立国語研究所）

1. 本発表の目的と経緯

現在、日本語教育研究領域の本プロジェクトでは「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(International corpus of Japanese as a second language, I-JAS) という学習者コーパスを構築中（一部公開）である。本発表は、日本語学習者と日本語母語話者（以下、日本人）のモダリティに焦点をあてて、両者の表現形式や使用状況の変化について検討する。

I-JAS のデータに、調査者と学習者による2つのロールプレイがある。そのうちの1つは、料理店で週3日のアルバイトをしている学習者が忙しくなったので、店長に週2日に変えてほしいと依頼する内容である。日本人の場合は「週2日に減らしていただきたいんですけども…」のような表現が多い。一方、学習者の場合は「たぶん、2日、いいですか」（スペイン語話者）「私のスケジュールを変わってもいい？」（英語話者）などのさまざまな表現が出現する。分析を続けているうちに、日本語レベルが低い学習者には見られない、日本人が多用する表現があることに気づいた。それは、「週2日に減らせないかなあと思ひまして…」「2日に変更できないかなと思つて…」の「かなと思う」という表現である。そこで、本発表は次の2点について、I-JAS を含む3つのコーパスを用いて検討する。

- (1) 学習者の「かなと思う」等のモダリティ形式の発達過程はどうなっているのか
- (2) 母語による違いは見られるのか

2. データ分析と結果

分析対象としたのは、I-JAS から海外日本語学習者（12の異なる言語話者180名）、国内日本語学習者（30名）、日本語母語話者（15名）、KY コーパス（第二言語としての日本語学習者の話し言葉）から全レベルの英・中・韓の言語話者90名、C-JAS (Corpus of Japanese as a second language) から中・韓の言語話者6名の3年間のデータである。それぞれを分析した結果、「と思う・て思う」は、どの言語話者の学習者も多用されていたが、日本人に顕著に使用されている「かな」「かなと思う」は、学習者には使用が少なく、国内の学習者でも見られなかった。また、「かなと思う」が安定して使用されるのは、上級レベル以上の学習者であった。母語の異なりによる明確な違いは見られなかったが、「かなと思う」は、韓国語話者のほうが中国語話者よりも低いレベルで使用され、使用人数も多かった。

これらの結果から、本発表の目的に沿ってわかったことをまとめる。

- (I) 「かなと思う」の言語形式の発達過程は、「と思う・て思う」>「かな・かなあ」>「かなと思う」で、「かなと思う」が安定して使用されるのは上級レベルである。
- (II) 韓国語話者と中国語話者で若干の違いが見られたが、この点において母語の影響の有無を論じることは難しく、さらなる詳細な研究が必要である。

今後は、教育現場での「かなと思う」の指導も検討すべき課題であると考えます。